

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 明治初年、地理学者ライン博士の日本調査日記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 敏弘, Yoshida, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001495

明治初年、地理学者ライン博士の日本調査日記

吉田敏弘

昨年末、ドイツのボンからメールが届いた。二〇二二年の夏、國學院大學大学院の短期招聘で来日し、約一か月間、精力的に日本国内の調査を行ったトビト・ナウハイム君、そして彼の指導教授のヴィンフリート・シェンク氏(現ボン大学地理学研究所名誉教授)からであった。トビト君は先般、最高の評価で博士資格試験に合格したという。シェンク教授の審査所見にみる感動的な言葉の数々は、トビト君の論文の完成度の高さを示して余りあるものだった。トビト君の調査にささやかなサポーターを行った身として、この報は大変うれしいものだった。

トビト君の研究は、明治六〇八年にかけて来日したドイツ人地理学者ヨハネス・ユストゥス・ライン(一八三五―一九一八)の日本調査旅行日記を題材としている。ラインは日本の伝統産業調査のためにプロイセン政府より公式に派遣された調査員で、日本政府の許可のもと、一般の外国人旅行者が足を向けることなかった地方にまで旅程を伸ばした。彼の自筆日記には日々の行程と経過地の到着・出発時刻、気温や気圧などの気象データ、道中の地質地形やフロラ、フォーナ、そして沿道での景観に関する観察記録、さらに各地での日本人との交流など、さまざまな異文化体験に対する時々の感興などが克明に記載されている。本来の調査目的であった産業調査の記録に関しては、別のノートが用意されていたため、情報に乏しいが、旅行日記としては詳細を極めたものといつてよい。

ラインはこの日本調査を終えて帰国後、西洋で初となる科学的日本地誌『日本』全二巻を出版し、ベルリン大学に転任したリヒトホーフェンの後任として、ボン大学教授に着任した。ボン大学在任中、日本からの留学生は何かとラインに頼るところがあり、ラインもその期待に応えていたようだ。日本では「ライン博士」と呼びならわされ、東大の地理学初代教授となった山崎直方もまたボン大学留学中、ラインに親しく教えを受けた一人であり、『地理学評論』の創

刊号に紙碑を兼ねた「ライン博士とライン文庫」なる一文を寄せている。

石川県白山麓の桑島の里では毎年夏に「ライン祭」が行われている。ラインが白山登山を終えて桑島（当時、島村）を通過した時、この地で植物化石を発見したことに因むもので、以来、この地域は化石採集で著名となり、恐竜化石の出土は地域活性化のシンボルとなった。私は二十年以上も前に、白山登山の帰途、この祭に立ち会う機会があったのだが、ドイツ本国、いやボン大学においてさえ知る者も少ないライン博士の名が、桑島において今なお顕彰されていることに深い感慨を覚えたものである。

ドイツにおけるライン博士関連資料の収集に尽力された楠根重和氏（ライン博士顕彰会顧問・金沢大学名誉教授）の資料調査と仲介により、ラインの生地、ラウンハイム市博物館に所蔵されていた日本調査日記が陽の目を見られることとなり、日記はボン大学のシェンク教授の研究室に持ち込まれ、早速その解説・翻刻プロジェクトが立ち上げられた。この作業を実質的に担当したのがトビト君であり、彼はその作業と並行して地理学者ラインの伝記的研究で修士論文を完成させた。ようやく完成した日記の翻刻は、ボン大学地理学研究所の紀要『Colloquium Geographicum』の 37、38 巻に、『Japan 1873-1875: Die Tagebücher des Bonner Geographiprofessors Johannes Justus Rein』Band 1, 2 (2020, 2021) として出版された。その第 1 巻にはシェンク教授の序文とトビト君の修士論文を基とした詳細な解題、第 2 巻には楠根教授によるラインと日本との関係に関する論考が収録されたほか、日記全体を通して楠根教授による詳細な注記が付され、日本国内の地名には漢字表記も示されている。なお 2 巻には、求められるままに草した筆者の小論（英語）も掲載されている。これは、ラインの日記にしばしば登場するドイツ東亜学会（OAG）が設立した芝の博物館をめぐる短報だが、日記がもつ歴史資料としての利用可能性を示したものであり、その日本語ドラフト「一八七四年東京における『もう一つの博物館』…歴史資料としての日記」は、内川隆志教授のご好意で、『國學院大学博物館学紀要』第四八輯に掲載していただいた。

維新前後の日本を訪れた西洋人の日記はすでに多くが知られ、さまざまな研究に活用されてきたが、このライン博士の日記は全くの新出資料であり、西洋人が初めて辿る行程も多く含まれた貴重なドキュメントとして、各方面での活用が期待される。そしてトビト君の博士論文がこの日記からいかなる世界を描き出しているのか、一日も早い論文の出版が待たれるのである。

（歴史地理学・地図学）